

川柳にみられる歯科医療風俗史（第2報）

谷 津 三 雄* 出 地 弘**
松 本 好 正*** 中 村 一****

第1報後に集録した川柳から歯科医療風俗史並に救急蘇生と一般医療に関するものを摘録したので続報としたい。

研究資料

1. 吉田機司編：現代川柳，緑地社，昭和30年10月刊

2. 山本成之助：続川柳医療風俗史（19），日本医事新報 No. 2700，昭和51（1976）年1月24日号

3. 山本成之助：続川柳医療風俗史（18），日本医事新報 No. 2695，昭和50（1975）年12月30日号

4. 原田常治：川柳漫画と番附いろいろ，社会百面相，大日本雄弁会講談社，昭和6（1917）年7月刊

研究成績

1. 吉田機司編：現代川柳（緑地社，昭和30年10月刊）

人生の巻の人間の項に

舌：

。本当と嘘と女の舌は生き 和三
。核心に触れて被告の舌もつれ 行成
。毒舌も愛嬌になる 齢となり 丹六

顔：

。良い顔がようやく出来て社へ急ぎ 角嵐
。世に叛く顔をとり巻く写真班 塊人
。花火しませう父の顔，母の顔 史呂
。呼出して襖の陰へ顔を借り 良祐

。顔の疵善行章のミスポリス 文久
。倅な乳さえやれば足る寝顔 竹荘
。何をしに来たと警察顔を上げ 鳥語

口：

。会社では口ほどもなき夫なり 行灯
。大口をあいてブギウギ人気あり 鈍拓
。淋しさを口で笑える人だった 太公
。口の端にのぼって二人強くなり 風閑
。髪勾い紅唇かくも袒国染け 正夫

歯・歯医者：

。総入歯はずせば母の母に似る 敏行
。売喰いの暮しに金歯だけ光り 彩花
。下は義歯上の寿命も遠からず 敏子
。いい加減またせて歯医者どてらで来 敏行
。歯医者今日ルージュのついた手を洗い 健太郎
。若くなりましたと歯科医手を洗い 詩楽
。逃げさせはしない歯科医の枕なり 清幸

ガム：

。ガム噛んで女気のない返事する 絃一郎
。ガムペッとあぶれた宵をネオンの灯 九楽
。ガムを噛み々々男の嘘を嘲笑う 喜代志
。ガム噛んで若き世代を智慧もなく 徳三
。堕ちるだけ堕ちた女にガムがある 天国
。姉妹のガム噛みあきぬ映画評 素生
。毛の生えた手でジープからくれるガム 五柳

女医：

。女医ずばり言い難いこと言っのけ 梅子
。看護婦が次から次へ変る女医 落帯
。女医として心乱れる日のカルテ つとむ
。女医さんの主人待合室をぬけ 酔歩
。女医今日は健保の点で夜を更かし 鳥語
。待合室の花女医さんの好きなバラ 散二
。女医さんだからと納得させる母 修三

History of Dental Service found in Senryu (the second Report)

Nihon University School of Dentistry at Matsudo

* Mitsuo YATSU ** Hiroshi SHICHI

*** Yoshimasa MATSUMOTO

**** Hajime NAKAMURA

。中性化した女医さんでよく流行り
紅：

- 。口紅をおとして今日を忘れたし
- 。口紅の型さまざまに夜の陣
- 。東京へ行く唇を赤く塗り
- 。ただドルに媚びてどぎつく唇を塗り
- 。卒業を待ってたような娘のルージュ
- 。Yシャツの紅からもめて別に敷き

医薬分業：

- 。病人はどうでも医者が生きるスト
- 。急病だやれ先生だ薬局だ
- 。法案は患者と遠くかけはなれ
- 。分業を恨み薬局の戸を叩き
- 。医薬分業診察料に責められる
- 。病院で紙だけ貰う頼りなさ
- 。医薬分業ともかく安く癒りたし

救急車：

- 。わが家じゃないか案じる救急車
- 。救急車一瞬が水を打ち
- 。救急車三軒ばかり医者が留守
- 。救急車何かそわそわさせて過ぎ
- 。元旦の朝も救急車は走る

風邪：

- 。風邪の子を看とりその子のものを編み
- 。恋人の風邪大げさにいたわれ
- 。姐さんの風邪艶っぽい玉子酒
- 。家中の風邪をいたわる鍋のもの
- 。流感へ亭主のこわい飯が出来
- 。風邪薬母も一緒に口をあき

癌：

- 。子宮癌夫に済まなく病んでいる
- 。診断は癌新しく寝巻買う
- 。先代も胃癌で死んだ縄のれん
- 。食う夢がさめ癌研の窓灯り
- 。潰瘍にして仁術という見立て
- 。癌の父親族会議も知らず病み
- 。天麩羅が胃癌の鼻へ匂はせる
- 。貯金帳胃癌と知ってから崩れ
- 。胃癌から僕の脚気を羨まれ

胃病：

- 。胃を病んで三角の胃を意識する

莫平

紅寿

水府

涼秋

千代美

蜂の子

三四郎

阿茶

不村

新太郎

行成

藤吉郎

華村

吟鳥

三太郎

句六

金一郎

文人

機司

波而

瓢軽坊

波而

瓢軽坊

三久

笙人

雁三

てい女

扇啄坊

機治郎

敏行

遙司

敏行

義夫

紫苑莊

此佐緒

。正直で頑固で下戸で胃酸過多

。役得がつもりつもって胃潰瘍

。人生を胃散にたよる齢となり

心臓：

。強心剤ひと眼会はせる人を待ち

。心臓で通し心臓マヒで死に

。心臓の在りかを知った急停車

。バイブルはハートの躍るとこへ当て

隆鼻術：

。ちと無理な鼻を整形もて余し

。隆鼻術振返っている鼻と鼻

。整形科なる程という鼻がくる

。整形の鼻にそぐわぬ足の線

注射：

。致死量は打たずある夜で添うと書き

。注射器を煮沸する夜の窓白し

。ホルモンを打ってお女将のまだ若い

。アンプルを切る看護婦の手が白い

。ペニシリン花羞しき尻をなで

。注射針腕の入墨少しよけ

。気休めの注射が効いて名医なり

手術：

。手術台娘にされて降ろされる

。手術台性懲りもなく肪汗

。手術室天使いつもの顔でなく

。盲腸の手術あられもなく剃られ

病人：

。コスモスと話をしている薬ビン

。聖書あり般若経あり病み続く

。人間の弱さ三日の下痢に知る

。ハンカチに寂しく包む薬瓶

。中風の大彫物の哀れなり

。窓越しの唯一本の桐を病む

。痛ましい胸毛ベットに痩せ細り

。痛んで聞く下駄音みんな楽しそう

。病み上り畳にまでも馬鹿にされ

。健康な時だけだった無神論

新薬：

。新薬を上手にけなす黒焼屋

。死にもせずストマイの世に滞り

。新薬を訊けば保険医無愛想

○丸

一九堂

清風

五迷亭

栄子

波而

五柳

敏行

とんぼ

三狸洞

阿伊代

愚蓮子

波面

とんぼ

佳宝

チイ公

扇啄坊

都山

大呂志

四四坊

逢明

波而

三平

勇生

月男

井蛙

満帆

義春

言也

百楠

産詩朗

流泡

五迷亭

眉文

秀月

。新薬の名にまわらない母の舌
 。新薬を切り抜いてくる見舞客
 。扶助受ける身にマイシンの効く話
 。ペニシリン医者も生活へ少しふれ
 。ペニシリン効いた寝顔へ茶を淹れる
 。ペニシリンあらばの愚痴も七回忌
 。環境に負けた娘がくるペニシリン
 レントゲン：

。レントゲン美女もしこめも同じ骨
 。レントゲン性別のない骨になり
 。女体いまぶざまに透いたレントゲン
 。レントゲン不運な恋にしまい
 。レントゲン祈りをこめて息をとめ
 。レントゲン示談で済ます人に見せ

医者：

。仁術も算盤だけはよくはじき
 。毒を診る婦人科なんでも触れる
 。独身の女医一つ寝をやたら止め
 。婦人科医もっともらしく覗き込み
 。着流しの先生てんかん頼まれる
 。美しい嘘を婦人科開き馴れる
 。聴診器弘法灸をよけて当て
 。口籠るところをのみこむ婦人科医
 。御無沙汰の方がよろしい聴診器
 。訳もなく近所の医者をかろんじる
 。色町の出はづれにある泌尿科
 。医者として許せる嘘を一つ言い
 。素晴らしい胸に手間どる聴診器
 。婦人科はまだ目立たない腹で混み
 。聴診器黙って人を裏返し
 。聴診器女医は厳しい顔となり
 。小児科の窓くるくると風車
 。順々に泣かせ小児科やっと昼

薬局：

。薬局で事を済ませてそれっきり
 。薬局に慰められて戻る母
 。薬局の夫婦器用に産んでゆき
 。薬局が出来て無医村むえり
 。薬局に馴染んで子沢山の日々
 。四十過ぎ何か持薬を一つ持ち
 。日限を切った仕事に置くすり

朗風
 洞南子
 香魚
 とも角
 安彦
 花車
 廻楼

重男
 火呂志
 光一郎
 一瓢
 成一
 五柳

此佐緒
 一醉
 野猿坊
 夢生
 たい子
 蛤堂
 一丸堂
 窓帆
 伊知呂
 鞍馬
 産詩朗
 哲朗
 紅陽
 浦之助
 迷亭
 穴道郎
 良之
 祝平

天馬
 扇果
 一正
 鐘村
 白墨
 朗風
 雀郎

院長：

。一目見て院長らしい肥満型
 。院長の回診ベットしんとする
 。院長へ今日は詩人としての友
 。院長に訊けばジャガ芋ぐらいよし
 。院長も同じ人間風邪をひき
 。院長の素行看護婦知っており

看護婦：

。氷嚢を替え看護婦の小買物
 。看護婦の肉づきを見る腕時計
 。看護婦の癖も笑って退院日
 。看護婦の足音からむ夜の不吉
 。月曜の看護婦少し勾う髪
 。看護婦のマスクの鼻を考える
 。廻診へ看護婦別な顔で立ち
 。その花の見舞へ看護婦だけ黙り
 。重態の部室で看護婦塗ってゐる
 。看護婦の眉が検温器へくもり
 。懇ろになって看護婦ゆき届き
 。恋を知る看護婦白く白く着る
 。看護婦の和服の今日は池の坊
 。婦長室ナイチンゲールの額高く
 。花束が来た日看護婦邪険になり

松陽
 古燈
 万楽
 万楽
 柳葉
 竹堂

雨吉
 南々子
 迷柳
 百楠
 百楠
 百楠
 美柳
 朝陽
 一丸堂
 東洋樹
 増太郎
 一二三
 真顯男
 栄子
 機司

2. 山本成之助：続川柳医療風俗史（19），日本医事新報 No. 2700，（昭和51（1976）年1月24日）の「長生き」の項，二，老齡の症状に

。目は眼鏡，齒は入齒にて間に合へど 文化4年
 。奥齒二本が命なりけり 天明4年
 。老の身の軍（イクサ）出（ハナ）すも齒にもれて 天明4年

五. 初老に

。年四十よく揃ふ齒も根なし草 天明元年
 初老とは四十歳の異称で「根なし草」とは浮いて定まらぬ物事の譬えでよく揃っていた齒も根がぐらつき出したことに掛けている。

七. 米寿に

。賀の餅の御礼 口を耳の側 文政2年
 耳が遠いので御礼を耳のそばへ口を寄せていう。

九. 尚齒会

尚齒会の「齒」は年齢の「尚」はたつとぶ意で

老人を尊敬する集りで、今日の敬老会に当る。尚齒会はもと中国の風習で 845 年に白楽天が催したのが始めて、わが国では 877 年大納言年名が小野山荘で開いたのがその始めとされている。この尚齒会をうたったものに、

。おぶはれて来る人もあり尚齒会 安永
すなわち、背負われてくる老人の姿を指している。

。さまさまの図両（カゲボシ）見ゆる尚齒会 明和

すなわち、足腰に障害のある老体をさまさまで影法師にかけたもの。

。来年も又めでたうと尚齒会 天明 4 年
。初老を二歳となぶる尚齒会 寛政 4 年

初老は四十歳の異称、二歳は若者を罵ってという語である。

。やわらかき飯を馳走の尚齒会 文化 8 年
。献立も豆腐勝ちなる尚齒会 文政 12 年

。尚齒会白髪奇麗に独活鱈（ウドナマズ） 文政 2 年

3. 山本成之助：続川柳医療風俗史（18）、日本医事新報 No. 2695、（昭和 50（1975）年 12 月 20 日）

本誌には歯科に関するものはないが救急蘇生に関するものがあるので摘録すると次のごとくなる。

頓死の項に

。放籠屋の食喰ふ内に頓死して 元録 6 年
。当分は涙こぼさぬ頓死哉 元録 9 年
。頓死見りや達者が頼みに成るでもない 享保 16 年

。和尚の頓死 評判がよい 寛政
。往生は頓死 茶粥は芋がよい 寛政 8 年
。初松魚（ハツガツオ）喰うて頓死を待つばかり 明和 7 年

頓死とはにわかに死ぬことで急死、すなわち今日のポックリ病と考えるとよいであろう。初松魚は旧 4 月末にとれる鰹で江戸っ子は「蛤を質においても」これを食わないと恥であるとしていたものである。

。朝飯過ぎに頓死見はける 寛政 1 年

。昼寝のままの頓死うらやむ 文化 2 年

。痛まぬ様に頓死扱ふ 文化 2 年

。頓死と知らず、こそぐって見る 文化 2 年

。頓死の人をこそぐって叱られる 文政 2 年

。初手は頓死を叱る夜廻り 文化 6 年

すなわち、初手は最初道路上に倒れている頓死の人を酔っぱらいかと思って叱る夜番

。馳け付けた頓死に暫し涙さへ 文化 6 年

。頓死奇麗に桐の葉枕 文化 10 年

。頓死の亡者、寺を忘るる 文政 2 年

あまりの急死に寺を忘れてしまったとは面白い。

。頓死の口に今朝喰った飯 文政 4 年

。一生の声を頓死の耳のはた 文政 10 年

。百歳を頓死あはれに目出度くて 文政 10 年

。御知らせ笑止仕り候、頓死 天保 2 年

。頓死をしたで誉められる独り者 天保 4 年

なお、「頓死」に類するもので江戸に「俄死」「眠り死」「ぼくり死」、上方に「頓病」「頓症死」「寝入り死」などの句があるので、それをあげると次のごとくなる。

。俄死、秋の哀れと二升泣 元録 7 年

すなわち、葬式で大泣きできる人を「二升泣き」という。また、死と秋の哀れとは 2 倍泣くの意である。

。頓病の死は風なくて散る桜 享和 14 年

。頓病死 二日三日は待つ作法 宝永元年

すなわち、頓死の場合は蘇生する可能性もあるからとて、土葬、火葬は二日、三日延ばすのが作法とされていた。

。寝入り死、てっきり何ぞ云いたかろ 元録 16 年

。イムチ（オトケセン）、刻み終って眠り死 宝永元年

。鳥もきき魚も食ふてのぼくり死 天保 2 年

ぼくり死とは今日のポックリ病とその語呂があって面白い。

蘇生の項に

。蘇生を触るる山伏の妻 宝暦

。和尚をはじめ蘇生見て居る 安永

。蘇生した日を年々に祝ふなり 明和 7 年

。隠すものばかり蘇生の枕もと 明和 7 年

- 。蘇り御寺へ対し気の毒さ 安永元年
- 。蘇生は死んだよりは騒動 寛政11年

以上の句から昔は死亡確認が正確でなかったり、また、仮死の場合などしばしば死んだはずの急死人が蘇生したのであろう。

。半甲に蘇生の天窓剃り残し 文化10年
すなわち、死者はその頭髪を剃って棺に入れる風習であった。半甲とは頭髪を半ば剃って後の方を残しておくことで剃っているうちに蘇生した場合をさしている。

。片小髻剃って蘇生の大笑ひ 文化12年
すなわち、「片小髻」とは片髻で側頭部の頭髪の称で側頭部を剃っているうちに蘇生してしまったとのことである。

。蘇生の棺も焚けや左義長 文政12年
すなわち、左義長とは正月15日に門松、しめ飾り、書初めなどを焼く行事で不要となった棺を焼くことは目出たいことで左義長を焼く時のようであるという。

。蘇生の側へ怖々に寄る 文化10年
。蘇生して見れば此世に忘れ物 文化14年
。蘇生の咽をひいたと出る餅 文政4年
。蘇生してまた四五日は客のやう 文政12年
。辞世が反古（ボコ）になってびんぴん

文政12年

。人塊儀、再勤仕り候蘇生 文政12年
すなわち、人体を一度出た人塊が、蘇生したのでまた人体の中で勤めることになったと勤務の届出の書式に凝して詠んだもので面白い。

仮死・変死の項に

。活を入れには先生が出る 文化
。死を当てて活入れ利かぬ大騒ぎ 文政14年
。柔術の弟子の殺された礼 文政14年

すなわち、柔術（道）では、よく仮死に対し活を入れる術で蘇生を行うことから一時仮死状態となった後、活を入れられて恢復しその礼を言うという意になるであろう。

。変死のむささ思ひ出しても 文化元年
。重なってるので検使の苦笑い

はおそらく腹上死であろう。

。水死の検死昼もあやなし 文化
すなわち、溺死は明るい昼でも男女の区別がつかないとの意であろう。

4. 原田常治：川柳漫画と番附いろいろ，社会百面相，大日本雄弁会講談社，明治6年7月刊

- 。骨揚げに泣き泣き金歯探して居る (飴ン坊)
 - 。親の恩歯が抜てから噛しめる
 - 。口と財布は緊るが得
 - 。良薬は口ににがし
 - 。口は禍の門，舌は禍の根
 - 。歯医者でははづかしくない口をあけ (映絲)
 - 。吸入器噛みつきさうな姿なり (春雨)
 - 。鼻毛ぬきかたくつかんで馬鹿な面 (古川柳)
 - 。嬉しさの限りきたない歯が見える (花恋坊)
 - 。手拭を絞るに女口を曲げ (家路郎)
 - 。婦人科へ人は見掛けによらぬなり (余念坊)
 - 。ひる前に起きて楊貴妃歯を磨き (剣花坊)
 - 。病人にちと長過ぎる女客 (安泰子)
 - 。美女の口歯医者は接吻しきう也
 - 。目鼻口手足は人の並なれど心一つで廃る身体ぞ
 - 。合ぬ歯の根で無理からくわへ口惜紛れに煙管 (きせる) 噛
 - 。傷はここだと歯で撫て見る昨夜噛れた恋の傷 (歯科医の娘)
 - 。笑は金歯を見せる種
 - 。母親は欠伸した子の歯を見つけ (辰蔵)
 - 。歯痛みは笑ふ声にも腹が立ち (夢)
 - 。もう一度入歯を取れと孫ねだり (春雨)
 - 。歯ブラシのままで隣へ言ふ年賀 (柳子)
- 結 び

川柳は日本における諷刺詩のなかで最もはっきりした系譜と永い歴史をもつものである。そもそも医療や歯科医療は一般大衆とともにあるべきもので、この点大衆より庶民文学を通して医療や歯科医療に対するフィードバックと考えれば川柳のもつ意義は一般に考えられているよりも遙かに大きい。